

第四回 小湊に義実義を聚む
笹内に孝吉鬻を逐ふ

却説義実主従は、此の池、彼川と、淵をたづね、瀬に立て、途より途に日を消せば、白濱の旅宿へかへらず、ゆき〜て長挾郡、白着河に涉獵ほどに、はや三日にぞなりにける。日数もけふを限りと思へば、こころ頻に焦燥のみ。獲は殊にありながら、小鯛に等しき鯉だにも、鉤にかゝるは絶てなし。千劔振神の代に、彦火々々出見尊こそ、失にし鉤を索つゝ、海龍宮に遊び給ひけれ。又浦嶋の子は堅魚釣り、鯛釣かねて七日まで、家にも來すてあさりけん、例に今も引く糸の、察れ苦しき主従は、思はずも面をあはして、斉一嗟嘆したりけり。

浩処に河下より、声高やかに唄ひつゝ、こなたを望て來るものあり。主従これを見かへれば、最蓬げなる之見也。什麼いかなる打扮ぞ。ふり乱したる髪は、春の未黒の芒の如く、搔垂たる裳は、秋の浦による海松に似たり。手ともいはず、顔ともいはず、あやしき瘡のいできたる、人の皮膚はなきものをや。熱せる荔枝、裂たる柘榴、巨たる臺の背といふとも、かくまではあらじかし。さても命は惜ぎものかな。世に疎れ、人に嫌れても、得死ざりける。うち見ても忌々しきに、渠は何とも思はざるにや、底斜なる面桶をうち鳴らし、誰たる声して唄ふを聞けば、里見えて、白帆走らせ風もよし、安房の水門による船は、浪に碎けず、潮にも朽す、人もこそ引け、われもひかなん「くり返して〜來る程に、やがて河邊に立とゞまり、彼人々の釣するを、つく〜とうち見てをり。流るゝ膿血の臭ければ、主従は鼻を掩ふて、とく逝かし、とおもふものから、乞見は立こと久して、近くよりつゝひとり〜に、空の内をさし覗き、「あな刀祢はらの釣をまこそこころ得ね。或は鯛、或は鯉、鉤を吞をば皆捨て、何をか獲まく思ひ給ふ」としば〜問れて氏元は、已ごとを得ず頭を回して、「否わが容するものは鯉也。他魚は好しからず。無益の殺生せじと思へば、一ツもとゞめず放せし」といふを乞見は聞あへず、腹を抱てうち笑ひ、「こゝにて鯉を求給ふは、佐渡にして狐を訊、伊豆大嶋に馬を問より、なほ劣して功なき所為也。いまだ聞召れすや。安房一國には鯉を生ぜず、又甲斐にも鯉なしとぞ。是その風土によるもの歟。又一説に、一國十郡ならざれば、彼魚はなきもの也。波目の冠たるものなればといへり。そのなき物を求め給ふは、實に無益の殺生ならん」とあざみ傲りつゝ、掌を拍て、又「呵々」とうち笑へば、義実おぼえず卒を捨「現巨魚は池中に生せず、大鵬は燕雀の林に遊ばず。われいかなれば世を扶み、天高けれども踞り、地は厚けれども踏して、安房一郡の主にすら容られず。然るを喻を龍に取り、今又鯉に久後を、思ひよせしは愚癡なりき、元來鯉はこの地方に、なしとしりつゝ釣せよ」といひつゝ人の心の

底は、濁江ながら影見えて、ふかき伎倆と今ぞしる。もしこの乞児に逢ざりせば、彼毒計にあてられなん。危かりし」と今更に、只管驚嘆し給へば、乞児はこれを慰て、「さのみ悔しく思ひ給ふな。陸奥にも鯉はなし。彼処は五十四郡なり。しかれば鯉の生すると、生せざるとはその國郡の大小によるものかは。かくれば一國十郡に充ざれば、鯉なしといふものは、牽強附会の臆説ならずや。十室の邑にも忠信あり。譬は里見の御書司、上毛に人となりて、一國を知るによしなく、この処に漂泊して、膝を容るゝの室なき如し」といふに主従目を注して、乞児の顔をうち熟視る。そが中に義美は、うち聞毎に嘆息し、「人は形貌によらぬものかな。汝が辨論乞児に似ず、楚の狂接輿の類なる哉。又彼光明皇后に、垢を搔せし権者の類哉。固より吾をしるもの哉。その名を聞まほしけれ」と訝り給へば、莞然と咲、「こゝは人の往還繁かり、誘給へ」とて先に立ば、主従はなほ訝ながら、遽しく竿をおさめて、後に跟つゝゆく程に、小松原の郷近き、山陰に誘引て、おのが背にうち被たる、菰を脱て塵うち拂ひ、樹下にうち布きて、義美を居まらすれば、氏元と貞行は、夏草を折敷て、主の左右につゐるたり。

當下乞児は逡巡して、恭しく額を著、「いまだ見参に入れるものに候はねば、不審と思召けん。これは神餘長狹介光弘が家隸に、金碗八郎孝吉と呼れしものゝ、なれる果にて候かし。金碗は神餘の一族、歴々たる武士なれ共、

【挿絵】「白菅河に釣して義美義士にあふ」「里見よしさね」「堀内貞行」「杉倉氏元」「金碗孝吉夜里人をあつむ」「金まり八郎」

庶子たるをもつて家臣となりぬ。しかれども老臣の第一席に候ひしが、某はやく父母を喪ひ、年なほ井に充ざれば、その職に堪すとて、このときに微禄せられて、僅に近習に使れたり。かくて主君の行状よからず、色を好み、酒に荒み、側室玉梓に惑溺して、後堂の内を出す。佞人定包を重用して、賞罰を任せしかば、これより家則いたく紊れて、神は怒り、人はうらめり。その危きこと鶏卵を、累たるに異ならねども、老黨は祿の為に、その非をしりつゝこれを諫す、民はおそれて訴へず。君はみづから法を犯して、これを睥るによしなれば、某類に面を犯して、争ひ諫れどもそのかひなし。比干が肝を刀尖に串き、伍子胥が眼を東門に掛るまで。しばしは諫めて用ひられずは死ばや、と思ひ候ひしが、つくゝと思ひかへせば、臣として君の非をいぶ、その罪も又輕からず。大廈の覆んとするときに、一木いかでかこれを柱ん。身退くより外なし、と既に深念を決しかば、那古七郎、天津兵内といふ、兩個の同僚にのみ、志を告しらせ、妻子なき身の心やすさは夜に紛れて逐電し、上総へ赴き、下総へうち越へ、上野下野いへばさらなり。陸奥の盡処までも、旅

より旅に日を弥る。便着には倣得たる、劍術拳法の師範と呼ばれて、是首に半年、彼首に二季、またぬ月日もたつとしなれば、はや五年を経るまゝに、故主の安否心もとなく、今茲竊に上総まで還りしことは奈麻余美の、甲斐こそなけれ主家の滅亡。皆定包が逆意に起りて、杣木林平無垢三等が、獵前に命を隕し給ふ、と聞するときは、腸断離れ、骨も碎る心持せり。

件の林平無垢三は、父がときより生育せ、年來使ひし私卒なりき。彼等もをささぐわが家の、劍法を傳受しつ。快気なるものなれば、農家の子には生れても、畊耘る事を好まず、いつまでとも思ひけん、某に棄られて、又土民にはなりたれども、苛法の苦しきに、主の仇、身の讐なる、定包を射て殺さん、と思ふ矢坪をはかられて、うたてき所行をしてけり、と推量れば猶怒ても、怨倦ぬは彼逆賊、狙撃んと思へども、面は豫て見しられたり、近づくへうもあらざれば、晋の豫議に做ひつゝ、身に添して姿を覆ひ、日毎に灌田を徘徊して、間なく時なく窺へ共、露ばかりも便りを得ず。怪しむ人のなきにあらねば、且く彼処を遠離りて、この処へ来る程に、よに隠れなき巷の風聞、里見冠者義美ぬし、結城の屯を脱れ来て、麻呂安西をたのみ給へど、彼人々は能を忌み、才を媚みてこれを用ひず、刺言を設て、殺さんと計れるよし、不思議に耳に入るといへ共、君に告なん因はあらず。一々たび御名を聞しより、只嬰兒が垂乳母を、慕ふ心持はするものから、そは何処にどうちつけに、人に問へきことならねば、胸のみ苦し。しかはあれど、いかでめくりもあはんとて、彼此となく呻吟し、けふはこゝにとしら善の、河邊に来れば釣する刀祢ばら、他郷の人とおほしきに、人表骨相平人ならず。親しく見えても礼儀に稱ふ、その為体は主従也。これぞ正しく彼君ならん、と推量れども白地に、いひよるよしも消漕ぐ、壘が舟歌に擬へて事情を述たりし。何とか聞せ給ひけん。里見えて〜とは、里見の君を得て歡ぶ、民の心を表したり。白帆走らせ風もよしとは、白帆は源家の旗をいふ。こゝに義兵を揚給はゞ、威風に靡ぬ民草なし、といへるこゝろを隠したり。安房の水門へよる船は、浪に碎けず、潮にも朽ず、人もこそひけ、われもひくとは、『荀子』に所云君は船也。君今漂泊し給ひて、麻呂安西等に忌嫌れ、難義におよび給へども、國人なべて鼻肩たてまつれば、竟におん身に恙なく、灌田、館山、平館なる、剛敵を、うち平げ給はん、と祝してかくは諷る也。今義に仗て旗を揚、猛に灌田へ推寄せて、定包が罪をかぞへ、短兵急に攻給はゞ、一挙して城を落さん。彼賊既に誅伏して、平郡長挾を取給はゞ、麻呂安西等は討ずも倒れん。先にするときは人を制し、後るときは征せらる。とく〜思ひたち給へ。彼城は如此々々なり、筒様筒様」と地理要害を、手にとるごとく述べしかば、氏元も貞行もよに憑しき心持して、頻に耳を側したり。

かゝりけれども義実は、その議に従ふ氣色なく、「いはるゝ所われには過たり。謀よしといふとも、寡をもて衆に敵しがたし、況われは浮浪人なり。何を因に躬方を集ん。今只主従三四人、瀧田の城を攻んとせば、蟻螂が斧を揚て、車にむかふに異ならず。及がたし」と辞給へば、金碗八郎小腰をすゝめ、「いふがひなく見え給ふものかな。大約二郡の民百姓、彼逆賊に虐げられ、怨骨髄に徹るといへども、権に壓れ、威におそれて、且く渠に従ふのみ。人として義によること、草木の日影に向ふがごとし。君今こゝに孤独を辞せず、神餘が為に逆を討、民の土炭を救んとて、一トたび箱を揚給はゞ、蟻の密に聚ぶが如く、響の物に應ずるごとく、皆勸で走集り、仁義の軍に命を擲、生ながら定包が穴を咬ん」と願ざるもの候はんや。孝吉物の数ならねども、計畧をめくづして、衆人を集合んこと、掌をか入すより易かり。計畧は筒様々々」と問ちかく尋て密語は義実は「有理」と應て、はつかに點頭給ふにぞ。

側に聞る氏元等は、「奇なり、奇なり」と感嘆して、又さらに孝吉を、とさまかつさまうち熟視り、「惜かな金碗との。忠義の為とはいひながら、皮膚は瘡に包れて、つやゝ人の面影なし。さでは躬方を集るに、しる人ありとも、名告るとも、それとは思ひかけざるべし。もしその瘡の頓に愈る、良薬なくは不便の事也。藥劑もがな」と慰れば、孝吉聞て袖を揺揚、「故主の為に身もをしからず、遂に廢人となりぬとも、彼逆賊を滅さば、望は既に足なんものを、わが為による軍兵ならねば、面影は変るとも、露ばかりも妨なし。必懸念し給ふな」といひつゝ腕をかき拵れば、義實且く沈吟じ、「志はさもありなん。さりごと愈る瘡ならば、愈すにますことあるべからず。漆は蟹を忌もの也。されば漆を掻く家にて、もし蟹を煮ることあれば、漆ながれてよらずとなん。よりて思ふに、今その瘡は、漆の毒に觸たるのみ。内より發きしものならぬに、蟹をもてその毒を解ば、立地に愈もやせん。用ひて見よ」と言へば、孝吉その智に感佩して、遂に又是を推辞す。「この浦由には蟹易かり。いかで試み候はん」といひつけます折もよ、蟹の子どもが頭のつゝに、魚籃を載つゝ來にければ、直行氏元遽しく、「こやゝと呼とめ、何ぞと問は蟹也けり。あな愛たしと笑ながら、遣りなく買とるに、その数三十あまりあり。

義実はこれを見て、「筒様にせよ」と教給へば、孝吉はこゝろ得果て、その半は生ながら、甲を砕きて全身にぬりつ。そが間に直行等は、腰なる燧をつち鳴らし、松の枯枝を折焼て、残れる蟹を炙りつゝ、甲を放、足を去て、孝吉に與るを、ひとつも残さず服せしかば、さしも今まで臭かりし膿血は乾き、瘡痂は、只掻く隨に脱落て、大かたならず愈にけり。現掲焉藥の効驗、神佛孤忠を憐て、かゝる奇特を示すに似たり。「奇也」と氏元は、直行もろ共縦に見つ、横にながめて

嘆賞しく、「あれ見給へ」と指せば、孝吉は馬蹄迹の、溜水を鏡にして、わが面影をつくくと見
つゝ感涙を禁あへず、「皮膚はつゞける処もなく、搔乱せし瘡は、今立地に愈たる事、文武の道に
長給ふ、良將の賜なり。名医は國を医するとかや。某が身ひとつは、肩にも候はず。乱れし國
をうち治め、我の苦難を救ひ給はゞ、意にこよなき仁術ならん。此ところは麻呂安西が、采地に候
はねば、よじや限れる日を過す共、彼等もせんすへなからん故。さりとして猶豫すべきにあらず。嚮
に密語まつせしごとく、はやく彼処へ赴き給へ」と叮嚀に勧めつゝ、蓬の髪を搔あげて、髻短
に引結ぶ。腰には縄の帯ながら、隠してもてる匕首を、さして往方は小湊の、浦曲廻に誘引ぬ。
さる程に、金碗八郎孝吉は、里見主従に郷導して、小湊へ赴けば、夏の日ながらは暮て、廿日
あまりの月はまだ、待としなれば出やらず、只誕生寺の鐘の聲、儂れば亥の時なり。さてもこの
小湊なる、高光山誕生寺は、敢川村のうちにあり。日蓮上人出生の地なるをもて、日家上人開基
して、一字の精舎を建立し、誕生寺と名けたり。かくてぞ良賤渴仰し、念この檀那となりしか
ば、法門長久に繁昌す。俗にいふ上総の七里法華、安房七浦の經宗とて、大かた題目宗なれども
就中長挾郡は、祖師誕生の地なればにや、苟且にも他宗をまじへず、偏固の信者多かりける。
されば金碗孝吉は、豫て計りしことなれば、且里人等を聚んとて、誕生寺のほとりなる、竹叢に火
を放たり。させる燃草ならねども、野干玉のくらぎ夜なれば、火氣忽地に天に衝て、梢の宿鳥立騒
ぎ、法師ばらは撞木を早めて、鐘を撞ごとしきりなり。
かゝりし程に彼此なる、里人等は驚き覺て、門の戸推開瞻仰て、「すはわが寺に事こそあれ。起
よ、出よ」と罵りつゝ、里人は棒を引提、莊客は農具を携、漁夫舟人、衲子も釋氏も、おのゝ
先を争ふて、喘々走り來つ。と見れば寺は恙なく、其処を去ること兩三町、人もかよはぬ竹藪の
み、果敢なくも焼たるなり。夜は静にして風吹かず、里遠して小舎もなければ、人愈走り聚し比
火は大かたに鎮りて、鐘も音せずなりしかば、衆人更に呆れ惑ひて、鉢巻にせし手拭を、解つゝ汗
をとるもあり。「これはいかなる白徒か、うたてき所行をしたるぞや。野火のすきりてうつりし故。
斯とはしらす可惜宵を、人も我も起されて、逆きは十町、遐は三四里、飛ぶがごとくに走り來て
滅せしうへに立腹の、やるかたなきをいかにせん」とさりとてさせる事なきは、歡ぶべき筋ならず
や」といはれて咄と笑ふもあり。しうねく罵るものも皆、集合し儘に憩ひてをり。

當下金碗孝吉は、焼残りたる数蔭より、咳きしつゝ立出れば、衆皆齊これを見て、人が、鬼か、
とばかりに、目驚き目呆れて、「あれよ〜」といふ程に、孝吉は手を抗て、「衆人あやしむことな
かれ。われは甲夜より此ところに、你達をまつもの世」と諭せば更にと見かう見て、「原來正なき

所行をして、俺們を迷せし、白物は彼奴也。打よ。括れよ」と鬨くを、騷がず馳て進み奇縁由を告ざれば、しか思はるべきことながら、故なくこゝに火を揚て、你達を集合んや。名告をせん」と推鎮め、「その國乱れて忠臣あらはれ、その家難みて孝子出じ。志すことあればこそ、かくは浮世に隱匿、みのさま囂れ果たれば、それとは思ひかけぬるべし。われは舊の國主に仕し、金碗八郎孝吉なり。曩は君を諫かねて、心ならずも身退き、旅宿に年を経たれども、舊思いかでか忘るべき。逆田定包を撃ん爲、潜ひて故郷に立かへり、名を変、姿を囂しつゝ、をさへ隙を窺ども、人衆は天に捷、警は三里の城に居て、万人の従類あり。豫讓が劍を橋下に磨、又あるときは忠光が眼を魚鱗に覆どもかひなし。さりとして平館、々山なる、麻呂安西は心違く、逆に與して恥せず。古主に舊父ありといふとも、これらに機密を告がたし。形なき世を憤り、鬯なきこの身を恨るのみ。

怒に現身の、息の内こそ術なけれ。死しての後に冥になりて、遂に怨を復さんには、腹を切らん、と思ふ折、里見冠者義実ぬし、結城の奇手を殺脱て、白濱に漂泊し、安西等を頼み給ふに、彼等は忍てこぼしも留めず。箇様々々に言を説て、殺さんとせしかども、縋いまだその期に至らず。われはからずも白著の、河畔に行あひ奉り、忽卒に物いひかけて、竊に試み奉るに、彼君年なほわかしいへども、言語應對仁あり義あり、実に文武の良將也。大約結城に籠りし武士、或は撃れ生拘られ、恙なきは稀なるに、主従不思議に扉口を脱れて、こゝに漂泊し給ふこと、わが身ひとつの幸ならず。彼逆賊定包に、年來いたく慮られ、しのびへにうち歎く、你達が福ならずや。はやく彼君に従ひまゐらせ、定包を滅さずは、是則賊民也。一國なべて餘殃を受ん。國の為に逆を討、義に仗るものは良民也。ながく土炭を脱れて、子孫必餘慶を受ん。今このことを告んとするに、言は必洩易し。ひとりへにいふよしなければ、曰ことを得ず火を揚て、この鬯へ集會たり。こは苟且のことならず」と叮嚀に説示せば、僉歎てもる手を拍、「こよなく囂れ給ひしかば、面影を認れるものも、金碗どのとは思ひかけず、よしなきことをいひつるかな。不礼はゆるさせ給へかし。素より智もなく才もなく、虫に等き俺們なれども、誰か國主の舊恩を忘るべき、誰か定包をつらめしく思はざらん。憎しと思へどちから及ばず、勢ひ當がたければ、月日はこゝを照さずや、とうち歎きて候ひし。しかるに里見の君の事、誰とはなしに風声す。素姓を問は源家の嫡流、世に又罕なる良將也」と聞する日より慕しく、おのへ足を翹て、渴望せざるものもなし。夏の日よりも苛醒き、あせ大領に病養む、民草を憐て、こゝに軍を起し給はゞ、誠に國の大幸なり。孰か命を惜むべき。鬯は金碗どの、これらのおしを申給へ」と辭ひとしく応しかば、孝吉後方を見

かへりて、「其処にて聞せ給ひけん、はや緯成て候」と呼内まつせば、義美は、氏元貞行を將て數陸より、徐々と進み出て、衆人にうち對ひ、「われこそ里見義実なれ。乱たる世は殊更に、弓箭とる身のならひとて、修羅鬪場に奔走し、矢傷の鳥となるものから、悪木の蔭には憩はず。さりとして民の父母たるべき、その徳絶てなしといへども、人倘われを捨てたらば、われ亦その議によらざらんや。警は千里の駿馬も、その足なければ走りがたく、万里に羽を振、大鵬も、翼なければ飛ことなはず。われは孤独の落武者なれ共、今衆人の佐を得たり。遂になすことなからずや。さはれ滝田は剛敵なり。馬物具整はず、兵糧の貯なくは、佻々しく進みかたし。こはいかにして可ならん」と問れて衆皆面をあはし、「現しかなり」とばかりに、曇時回答はせざりけり。

そが中に、村長とおぼしくて、老たるもの兩三人、班をはなれてすゝみ出、「寔に御詫で候へば、聊、愚技を申なり。凡長坂一郡は、定包が股肱の老黨、菱毛酷六があつかりにて、東條に在城せり。こゝを去ること遠からず。且緯の手あはせに、酷六を撃給はゞ、物具兵糧いへばさらせ。一郡忽地おん手に入りなん。かくて滝田を攻給はゞ、進退自由に候はずや」と言委細に告まつせば、義実感嘆大かたならず、頻りに左右を見かへりて、「おのゝあれを聞たる哉。野夫にも功者ありとは、この叟等をいふべきなり。奇を出し、敵をはかるは、神速なるにますものなし。今宵直さま推懸て、彼処に備なきを撃ん。箇様々々にせよかし」と謀を示給へば、孝吉等はこゝろを得て、氏元貞行もる共に、聚合し村民を数れば、一百五十餘人あり。迺これを三隊にわけて、謀を傳れば、兪歡て令を兼、手に物なきは簞なる、巨竹を伐とりて、竹槍として扱む。その一隊は四十餘人、堀内貞行これを將て、假に金碗孝吉を縛つゝ、先陣に進けり。これ則義実の、計畫によればなり。後陣は則五十人、杉倉氏元大將たり。中軍は六十人、義実みづから將として、二隊は間徑より遶り出、城の正門のほとりにて、一隊にならん、といそがしたり。

さる程に、東條には、定包が目代なる、菱毛酷六郎元頼、「小湊の火を鎮めよ」とて、甲夜には夥兵を出せしか、火ははや滅つ、里遠き、野火なるよしを傳聞て、夥兵は途よりかへりつゝ、再寐の夢を結ぶ程に、暁がたちかくなりけり。

治処に人影、正門の城戸を敲くにぞ、門卒は駭かれて、誰と問ば、小湊なる、敢川の村長等が、盜賊を捕へしとて、牽立て來つる也。縁故を尋れば、「さ、候甲夜の間に誕生寺の竹敷なる、野火を滅んとする程に、癖者を捕たり。力量早技面魂、凡庸のものにあらず。聽て出処を責問ば、只罵て実を得吐ず。しる人ありてまつすやう、渠は舊の國主に仕し、金碗八郎孝吉といふものなり。古主の讐を復さんとて、姿を變じ、名を変て、月こる瀧田を徘徊せし、緯分明に顯れた

り。こは輕からざる罪人なるに、もし過失して走せなば、後難遁るべうもあらず。よりに曉るをまたずして、大勢して將て参りぬ。これらのよしを申給へ」と声高やかに訴けり。そのとき門卒は、窓推開ぎ、つらく見て、「よくこそしたれ、霎時等。まうして入れん」と応あへず、戸を引立て走り去、此彼にや告たりけん、且して互落々々と、門の首夏めかして、角門を推ひらき、「皆とく入れ」と呼入るれば、縛られたる態をして、先に進みし孝吉は、索をはらりと揮解き、左方に立たる兵士が、刀の鞘に手を掛けて、引拔奪て礮と礮る。刃の光もる共に、頭は飛で地に落たり。思ひかけなき事なれば、「こは狼藉や」とばかりに、慌忙く兵士を、追立進む貞行は、孝吉等に力を戮して、雜倒し、砍払ひ、無人郷に入るごとく、はや二の城戸へ攻つけたり。そが間に狂客們は、大門を推ひらき、鬨を咄と揚しかば、氏元と一隊になりて、溝端ちかく寄りたりける。義美これを聞あへず、「時分は今ぞ、図をぬかすな。すゝめ進め」と令し給へば、衆人何かは勇ざらん。馳て合する鬨の声、勢潮の涌ごとく、羂地に走入りて、「二の城戸をうち破り」、「狗黨の義毛」とく出ぬ。里見冠者義美ぬし、「この地に歴遊し給ひしを、衆人推て主君と仰ぎぬ。されば逆賊定包をうけ滅し、國の汚穢を掃給ふ、仁義の軍に誰か敵せん。そのゆくところ、過るところ、老弱饑餓盡して、これを迎奉り、只今線の手めはせし、まうこの城を獻りぬ。先非を悔しく思はんものは降参して頸を續げ。惑ひをとばは玉石と、もろ共に碎けなん。出よ〜」と喚かけて、縦横無碍に捲立れば、城兵ます〜辟易して、防ぎ戦んとするものなく、背を脱弓箭を棄、兪拝伏して命を乞ぬ。

かくて里見義美は、刃に衅すして、東條の城を乗取り、賊將義毛酷六を索給ふに、「渠ははや落亡て、その往方をしらず」といふ。義美聞て眉根をよせ、「彼もの慚愧後悔し、志を改めて、けふよりわれに従はゞ、われ舊惡を咎んや。然るを無明の醉醒す、いちはやく逃亡せし事、固より惜に足らねども、直に瀧田へ遁かへりて、定包に告んには、安西麻呂等に謀じ合せて、時日に移さず推よせ來つべし。われ今新に城を獲て、一三百の士卒あれ共、半は降参しつるものなり。主客の勢甲乙あり。謀合期せずして、三方に敵を受なば、何をもてこれに當らん。誠に諱々しき大事にあらずや。酷六既に走るとも、いまだ遠くはゆくべからず。氏元貞行一隊にわかれて、疾追留す」と令し給へば、「うけ給はりぬ」と応あへず、はやうち出んとする折から、金碗八郎孝吉は、何処へか走去けん、軍兵十人あまりを將て、忽然とかへり來つ。大將義美にまうすやう、「けふの働き彼此と、優劣は候はねど、某はこの城の案内をよくしりぬ。されば衆軍に先たちて、三の城戸をうち毀、賊將義毛酷六を、生拘んとてあさりにけれど、絶てその所在をしらず。顧に城の西北に

は、一條の活路あり、前面は檜山にして、右のかたは樹立ふかく、左は崖高して、下は千尋の谷川也。

【挿絵】「笹内に孝吉酷六を撃」「金まり大輔」「しへた毛こく六」

城中一の要害にて、人にしらすぬ秘所なれば、笹の内と名づけたり。彼奴はこゝより遁つらんと推量りて候へば、こゝろ利たる軍兵を駆催し、岨を傳ひ、臺にとり著、捷徑よりうち出て、前面を信と見たせは、女房子どもを衝に乗たる、主従すべて八九人、東南を指て走るものあり。熟視れば酷六なり。這奴もはじめは神餘の老黨、われには遙立まさりて、主君のおぼえ大かたならず。その祿をもて身を肥し、眷屬妻孥を養ひながら、忠義の為には得死すして、逆賊に媚諛ひ、東條に在城して、飽まで民を虐たる、天罰竟に追れず。落城のけふに及びて、逆るとも脱さんや。金碗八郎こゝにあり、かへせ戻せ、と呼かけて、透間もなく追蒐れば、輜夫どもはこれに警て、走跌き轉輒、衝を撲地とうち墮せば、女房子どもは吐嗟と叫びて、千尋の谷へ滾落、株に打れ、石に碎かれ、骨も遺す死でけり。

妻毛は眼前、妻子の横死を救ふにすべなく、鉾杖衝て岸邊に立在、こなたを信と見かへりて、脱れかたくやおもひけん、主従七人魚鱗に備て、追來る我をまつ程に、躬方は鶴翼に連て、鷲鳥の燕雀を撃ごとく、旋風の沙石を巻ごとく、吐と嘔て突崩す。地方は名に肩ふ節処也。天は明ながら雲ふかき、岨山蔭の樹下闇。進むも退も一騎打、互に識たるとちなれば、鏡の袖を潜脱て、先を争ふ躬方の英氣に、遁足馮たる雜兵等は、雲時挂て散散に、走るを追蒐追詰て、残りなく生拘りつ、竟に賊將妻毛を、撃とりて候」と辞せわしく演説して、件の俘を引居させ、酷六が頸もろ共、に、実檢に入れしかば、義実思はず嘆息し、「夫兵は凶器なり。徳衰て、武を講じ、澤足らざれば、威をもて制す。こは已ごとを得ざるのみ。城を攻、地を争ふも民を救ん為なれば、われ樂みて人を殺さず。さは定包に従ふもの、みな悪人にはあるべからず。或は一旦の害をおそれ、或は時と勢に、志を移すもの、十にして八九なるべし。この故に非を悔て、躬方にまゐるものとしいへば、やがて命を助るのみかは、用ざることなきものを、什麼いかなれば妻毛が、従卒は生拘られ、彼身は却頭を喪ひ、剩妻と子は、石壇水ともる共に、皮肉碎けて死たりけん。こは時と勢に、志を移されて、逆に従ふのみならず、必天の赦ざる、兇悪のものなるべし。よしや悪には従ふとも、みづから悪をなすべからず。努慎め」と説諭し、金碗が牽もて來せし、俘を釋放させ、「凡新にまゐれるものは、軍功の多少によりて、後日に恩賞あるべし」と正首に仰しかば、僉感涙を禁めへず」ととても捨へべき命なりせば、はじめりの君に、従ざるこことよ」と

、慚愧後悔今更に、身の置とこそをせしむりける。

かくて又義実は、孝吉等に宜ふやう、「酷六灌田へ逃かへらば、定包火急によせ来つべし」と思へば心安からざりしに、孝吉がけふの働き、わが胸中をきるに似たり。城兵散落せずといふとも翌日よりして三日が程には、必彼此へ聞えなむ。しからは麻呂と安西は、婿で定包を佐るなるへし。先にすれば人を制し、後るときは制らる。この曠昏につち發て、通宵走りて平郡に入らば、敵の膽を冷さん坂。初度の合戦、射方に利あらば、麻呂安西等は聞怕して、絶て頭を出すべからず。そはとまれかくもあれ、まづ勸賞を沙汰せん」とて、金碗八郎孝吉を、第一番と定させ、莊園夥賜けれども、故より思ふよしありとて、固辞ひてこれを受す。第二番には小湊にて、「東條を取給へ」と申す、とめじ斐とも、三人を召出して、その名を問せ給ひしかば、「三平四治郎仁徳」と答ふ。義実聞てうち微笑、「こはいと愛たき名せかじ。三平とは、山下麻呂安西の三雄を平る、前家といふべき坂。四治は四郡を治む祥也。二総は、則上総下総、後かならずわが掌に入らん坂。かればその名をひとつに合せて、おのへ三四十二个村に、今又二増倍すれば、三十六所の長たるべし」とて、御教書を賜にければ、皆万歳と唱う、歡いさみて退出けり。第三番は氏元貞行、この餘泛々の輩は、録するに違あらず。或は秩禄を知行れ、或は牽出物を賜れば、おのへ一拜舞しつ。」賞重して、罰輕し、死せるものも更に生、活る物は宋たり。江に還る車轍の魚、雪の中なる常盤木、君が齡はさゞれ石の、巖となるまで竭せじな」と令様を合白奏て、書き廻じ奉りぬ。

さる程に義実は、法度を寛して、民を安撫、軍令を正して、士卒を勵し給ひしかば、招かざれどもまゐるもの、数百人に及びけり。これらは過半とめ置いて、杉倉氏元ととも城を守らせ、僅に二百餘騎を將て、孝吉を先陣とし、貞行を後陣として、平郡へ進發し給へば、氏元はこれを諫て、「斯ては無下にめん勢寡し。この城にこそ三百の士卒あらば足なむ」と頻に密語申せしかば、義実頭をうち掉て、「否この城はわが巢也。もしこゝを破られなば、何処へか還るべき。合戦は必しも、勢の多少によるにもあらず、我に利めらば二百騎が、千騎二千騎にもなりぬべし。わがうへには懸念せで、汝はよく城を守れ。なほいふべき事こそあれ。麻呂安西等には和睦せよ、必これと争ふべからず。灌田の敵兵よせ来らば、力を竭して防ぎ戦へ。かならず出て追ふべからず。これ安全の良策也。努々懈るべからず」と叮嚀に説諭し、さて先陣をいそがして、馳て出陣し給ひけり。

果せるかな里見の一軍、その夜、前原浦と濱荻なる、堺橋を渡す折、義実の徳を慕ひ、風を望て帰降する、野武士郷士なむ、百騎二百騎うちわ立て、こゝにて追者奉り、軍勢千騎に

なりしかば、後々までもこの橋を千騎橋と唱たり。加旃この処は、むかし源頼朝卿、當國へ
推渡り、上総へ赴き給ふとき、この川のほとりにて、後陣を待せ給ひしとて、待崎と字せる。側
に白旗の神祠あり。義美則馬より下りて、征箭一條を奉納し、且く祈念し給へば、真夜中なるに
白鳩二隻、社頭の松の梢より、はたくと軒翳して、平郡のかたへ飛去ぬ。これを見る諸軍兵、
「合戦勝利疑なし」とて、勇むるものなかりけり